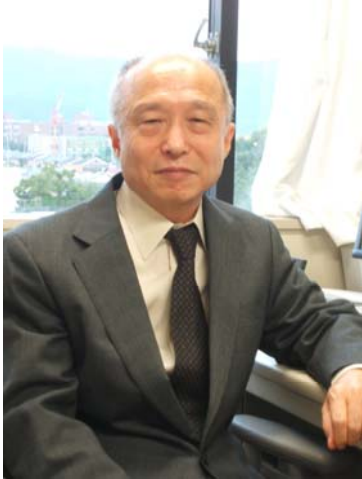


## 村田 久行 Hisayuki Murata

京都ノートルダム女子大学人間文化学部教授



1945年京都府生まれ。1969年京都工芸繊維大学工芸学部卒業。1979年神戸大学大学院文学研究科修士課程(哲学)修了。1985年神戸大学大学院文化学研究科博士課程修了。東海大学健康科学部社会福祉学科教授を経て、2004年4月より京都ノートルダム女子大学人間文化学部教授。専攻は、対人援助論、スピリチュアルケア研究、福祉原理、哲学。12年前から傾聴ボランティアを実践し、現在、傾聴ボランティア団体「日本傾聴塾」代表を務める。

### ■主な著書、論文

『改訂増補 ケアの思想と対人援助』(川島書店・1998年)、『在宅ケア悩みの相談室』(中央法規出版・1999年)、「臨床に活かすスピリチュアルケアの実際」(『ターミナルケア』2002年7月～2003年7月に連載)、「終末期がん患者へのスピリチュアルケア援助プロセスの研究」(臨牀看護 30, 2004年)、Spiritual pain and its care in patients with terminal cancer: Construction of a conceptual framework by philosophical approach. *Palliative and Supportive Care* 2003., Conceptualization of psycho-existential suffering by the Japanese Task Force: the first step of a nationwide project. *Palliative and Supportive Care* 2006.他 多数

### ■終末期がん患者のスピリチュアルケア

スピリチュアルケアとは、終末期がん患者が体験する生の無意味、無価値などのスピリチュアルペインを和らげ、患者が<死>に臨む苦しみの中にあっても、なおも生きる意味と価値を回復できるように支えるケアのことをいう。スピリチュアルケアというと最近まで、「霊的ケア」などと訳され、西欧では聖職者の行う宗教的なケアであって医療者は関わらないものとされてきた。しかし近年、緩和医療の領域ではスピリチュアルケアは宗教的ケアとは別個のケアであり、患者の信仰の有無にかかわらず医療において提供すべきケアであるとの認識が広まっている。

今回は、終末期がん患者の体験するスピリチュアルペインとはどのようなものかを紹介し、その構造とケアの指針を示すとともに、日本の医療においても、また、宗教においても、いまだ正面から取り上げられていないスピリチュアルケアを「医療と宗教をむすぶもの」という視点から考察してみたい。